
The EARTH n

魔猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The EARTH n

【Nコード】

N7457C

【作者名】

魔猿

【あらすじ】

月を取り巻くように現れた大小無数の青い光点。それは紛れもなく地球だった！驚愕の光景を目にした者達の中で何かが目覚め、戦いが始まる。

プロローグ

幼い頃、私は夜空を見上げるのが好きだった。

父は時々、小さな天体望遠鏡を持って、私たち兄弟を近くの丘へと連れて行ってくれた。

星々の世界は幼い私を魅了した。

宵の明星、天の川・・・季節毎に変わる星座たち。

中でも、白く輝く月に私の心は奪われた。

うつくしい地球の伴侶。

寝る時間を過ぎても子供部屋の窓から私は月を見つめ続けたものだ。時を忘れて夜空を見上げる私に、母が「もう寝なさい」と声をかけ、私が寝つくまでベッドの横から私の頬に手を当ててくれた。

母の体からはいつもいい匂いがした。

母の温もりと匂いに包まれて、いつの間にか私は眠りに落ちていった。

大人になった私は、夜空を見上げる事などなくなっていた。

父も母も既に亡く、兄弟は別れ別れになっていた。

幼い日の優しい思い出も遠い過去のものとなっていた。

ある日、日々の生活に疲れた私が溜め息と共に見上げた夜空は、幼い頃に見たものとは大きく変わってしまった。

私が愛して止まなかったあの月は、白い裸身を鮮血で染め上げたかのように赤く不気味に輝いていた。

そして、わが地球の伴侶たる月を大小さまざまな青い光点を取り巻いていた。

最も大きな光点、月ほどもある青い円盤を注視した私は驚愕した。

その姿は正に地球そのものだったのだ！

愕然とする私の中で何かが目覚めた。

そして、あの「声」が私に初めて語りかけたのだ。

追放の章 1 「強制排除」

月明かりの中、標的が姿を現した。

紺色の作務衣に身を包んだ男が手桶を持って井戸に向かう。

手押しポンプを上下させて井戸水を汲んでいる。

桶を手にした男がもと来た勝手口に向かう。

家の中からの明かりが男の顔を照らす。

確認した。

顔も身体的特徴も手渡された写真に酷似している。

あれが、特殊処理の対象の一方であることに疑いの余地はない。

家の中にはもう一方の標的も確実にいる。

情報によれば、余命幾許もない病人であり、床から立ち上がることも出来まい。

標的は既にこちらの手の内にあるに等しい。

N県K村。

13世帯32名の過疎の村である。

この村は今、国家保安庁特殊部隊に包囲されていた。

「・・・陸自部隊より連絡。県道および全ての林道を完全に封鎖しました」

「・・・1班、ターゲットを確認。ターゲットA・B共に1階の寝室にいます」

「・・・2班、包囲完了。いつでも行けます」

「・・・3班、突入準備完了」

スコープで窓越しに人影を見ていた隊長、戸部陽一はレシーバーのマイクに小声で命じた。

「作戦開始」

平成XX年特別国会、内閣総理大臣所信表明演説

・・・あの9・11米国同時多発テロに端を発する所謂「対テロ戦争」は、昨年我が国において発生した「3・15事件」により新たな段階に達したのであります。

9・11以来、我が国は世界的なテロとの戦いに有形無形の協力を果たしてまいりましたが、他方で我々日本政府及び日本国民は「対岸の火事」として、吹き荒れる国際テロリズムの嵐を楽観視したのではないのでしょうか？

我々は余りに無知であり無力でした。

我々の無知と安全に対する驕りが、我々日本民族を三度核の災禍に晒す結果を招いたのではないのでしょうか？

新しいテロリズムとの戦いは、今や民族・国家の存亡を賭けた戦争と言えます。

しかし、この「テロ戦争」から民族・国家の生存と国民の生命・財産を守るに我々は余りに無力で脆弱なのであります。

ここに日本政府は警察・自衛隊とは独立・専門の対テロ組織及び情報機関を設立し、テロリズムの脅威から国民の生命・財産を守り、テロ撲滅への国際的責任を果たすことを宣言します・・・

対テロ部隊としては従前より警視庁特殊急襲部隊（SAT）が有名であり、ゲリラ攻撃に対する警備訓練も行われてはいたが、実際の所、朝鮮人民軍レンジャー部隊によるゲリラ攻撃などには対処不能と考えられていた。

無駄な犠牲を防ぎ事態に即応する為には自衛隊の治安出動を要請して、普通科連隊や空挺団あたりに任せた方が無難。優秀なレンジャー部隊であれば、極めて速やかに効率よく確実に全員射殺できるであろう。との意見もあったが、「平事にテロに備えるのも、有事に外国の特殊部隊に備えるのも大差ない」という警察関係者のコメントに表わされる様に、テロ対策におけるセクショナリズム・・・警

察は自衛隊の出動、とくに治安出動に関しては、自分たちの存在意義に係わる問題だと捉えていたようだ・・・は激しかった。

また、自衛隊の治安出動については国民の拒否感も強かった。

しかし、東京都内で核爆弾が炸裂するという未曾有の3・15事件を期に、警察力によるテロ対策の限界が認識され、テロを事前に察知する情報収集活動の重要性がクローズアップされるようになった。

そのような中で、防衛省・警察庁とは独立した統合的な対テロ組織として実力部隊と情報機関を内包した国家保安庁の創設と、各種の非常措置、テロ事案における警察・自衛隊の国家保安庁への従属を定めた「対テロ特別法」は衆参両院において圧倒的多数の賛成を以って可決された。

この「劇薬」とも言える戦後日本の一大改革を核テロの恐怖に晒された国民世論もマスコミの論調も、その大多数が支持した。

村の住民は1ヶ月前に村に入った標的の男女2名を除いて全員が65歳以上の老人だった。

村から最寄の町までは県道を車で下って1時間弱。

その県道も台風などで度々寸断され、村は孤立した。

この人々に忘れ去られたような村が、今まさに地上から消滅しようとしていた。

国家保安庁極秘通達

・・・国家保安庁対テロ部隊の活動に此れまでの所過誤はない。しかし、その存在が既に知られすぎたと言う事実是否めない。内外の情勢が一段と複雑化してきた現在、極めて特殊な処理を施さねばならない対象も出てきているし、今後それが更に輩出して来る事が予想される。

すなわち、逮捕・拘留・起訴・裁判という一般的な司法手続きを履
践することが我が国の安全にとって極めて危険と判断される対象に
対しては超法規的な特殊処理が望まれるのである。

既に設けられた対テロ部隊は半ば公然化しているが、今次特殊処理
班は極秘裏に組織されねばならない。この案件につき関係各部の迅
速なる対応を求める・・・

（１０日前、戸部陽一と国家保安庁情報部長との会話）

部長「今回で８人目だね。情報部に特殊任務班が出来てから特殊処
理を行うのは」

戸部「はい。５件目の作戦です」

部長「納得がいかないようだね」

戸部「・・・いえ。ただ、本件標的の確保に我々が出動するのは些
が大袈裟に過ぎるように思われますし、何より『消毒』処置まで必
要なのか疑問がありましたので。出来れば避けたいですからね」

部長「君の疑問は十分理解できる。だが、部隊発足以来、最も悪質
かつ危険な標的だと考えてくれ。詳細は最高機密であり語ることが
出来ないが、標的２名の確保が本任務の最重要目的だ。作戦の帰趨
は国家安全保障の根幹に関わる」

戸部「はい。ここまで来て引き返す事は出来ませんからね。どんな
形であれ」

部長「兎に角、標的２名を確保・回収し、急行した在日米軍部隊に
引き渡す事。標的の生死は問わない。よろしく頼む」

戸部「了解しました」

電話線と送電線が同時に切られた。

暗闇の中、隊員達のナイフが１２世帯の老人達を襲う。

作戦開始から僅か15分で29名の村民が音もなく命を奪われた。

突入部隊が標的のいる民家に突入する。

勝手口から侵入した突入隊員、井口公平が老婆と鉢合わせた。

老婆が「あんだ、だ・・・」と声を出した瞬間、井口のナイフが老婆の喉を切り裂いた。

老婆の右手が偶然流し台の上にあった食器を払い落とし、食器の割れる音が台所に響いた。

奥から男が現れた。

井口に気付いた男が手に持っていたマグライトを点灯し井口の顔面に光を向けた。

顔面をいきなり照らされ、井口の暗視ゴーグルの視界は一瞬真っ白になった。

男の反応は素人離れしていた。

男は左斜め下からマグライトを振り上げ、井口の暗視ゴーグルを弾き飛ばした。

男は井口のナイフを持った右手を前腕で壁に押し付けながら、右手で井口の顔面を掴んだ。

親指と薬指の指先を井口の頬に食い込ませつつ、人差し指と中指を両眼に押し込む。

頬を握られた井口は男の手を外す事ができず、両眼をズブズブと貫かれた。

井口は獣の咆哮を上げた。

井口と共に勝手口から突入した加藤勇は井口が障害となって手にしたMP5SD4のトリガーを引く事は出来なかった。

男は井口の落としたナイフを加藤に向け、柄の上部にある釦を押した。

銃声と共に加藤が倒れた。

強力なスプリングによって発射されたナイフの刃が加藤の喉を貫いたのだ。

玄関から突入した渡辺浩二と木村仁志は寝室に入った。
寝室の介護用ベッドの上に女が一人横たわっていた。

標的の一方の女だ。

二人が寝室に入っても女は全く反応しなかった。

女は昏睡状態に陥っているようだ。

木村は女の酸素マスクを外し、白く細い喉を横一文字に切り裂いた。

井口の悲鳴と銃声を聞いた渡辺は廊下の突き当たり、茶の間のドアを開け中に突入した。

突入した瞬間、横から銃を叩き落とされ顔面を何か固いもので叩かれた。

そして、次の瞬間固い金属に喉を突き貫かれた。

渡辺はその場に崩れ落ちた。

激しい物音に振り返った木村の暗視スコープに鬼の形相で部屋に飛び込んで来た男の姿が映った。

木村は慌ててMP5SD4のトリガーを引いた。

フルオートで吐き出された28発の銃弾が男を襲った。

木村の左肩に激痛が走る。

左肩に何かが刺さっている。

痛みに気が遠くなりそうな木村は信じ難い光景を目にした。

多数の銃弾を受けもんどりうって倒れた男が大量の血を流し、のたうちながら這って来る。

どうなっていやがるんだこいつは！

激痛と恐怖に震える手で、木村はホルスターからSIG SAUER P230を抜いた。

男は木村の事が目に入らないかのように、ベッドに向かって這っていった。

男は一瞬立ち上がり、そして、次の瞬間、力尽きてベッドの女の骸

の上に折り重なるように崩れ落ちた。

2度目の銃声を聞いて家屋に飛び込んだ第2次突入隊4名は信じ難い光景を目にした。

たった一人の男に武装した特殊任務班の精鋭2名が殺害され、2名が再起不能の重症を負わされていたのだ。

戸部陽一は木村仁志の左肩に深く刺さり、彼の肩の神経叢を断ち切った「釵」を見て、背筋に冷たいものを感じずにはおれなかった。

作戦自体は単純極まりないものだった。

非武装の村を襲い標的の男女を確保する。

女は末期癌で死に掛けの病人であり、男も軍事訓練などを受けた経歴は無いただの肉体労働者だった。

口封じの為に消される村も、老人ばかりの過疎の村だ。

しかし、結果はこの有様だ。

戸部が「特殊処理」により回収した標的は過去4件6名であるが、人的損害が出たのは初めてのケースだった。

反撃すら予想外の事態だが、まるで戸部たちの作戦を事前に知りつつ襲撃を待ち構えていたかのような鮮やかな反撃。

しかも相手はほぼ丸腰の状態。

しかし、そんな相手に第1次突入隊4名が全滅させられたのだ。

木村は男を「鬼」と呼んだ。

実際、奴は人間ではなかったのかもしれない。

部長の言う通り、部隊創設以来、最も危険な標的であり、もたらされた結果も最悪であった。

しかし、戸部は、彼の部隊に創設以来最悪の損害をもたらしたこの男に畏敬の念を禁じ得なかった。

在日米軍に標的2名の遺体を引き渡して死傷者を収容した後、戸部

の部隊は村と付近の森林に火を放った。
村の全滅は山火事によるものと報道されるだろう。
戸部は深い疲労感に囚われていた。

追放の章 2 「追放者の肖像 - 1」

俺の人生は、はじめからツイていなかった。

ケチの付き始めは、とある島の海岸に捨てられていたことだろう。何らかの精神的ショックにより、全ての記憶と言葉を失った俺は、曲折を経て海岸で俺を保護してくれた老人の養子として引き取られた。

「新城」の姓は俺を育ててくれた老人の姓であり、「義人」の名は俺が最初に収容された児童保護施設で付けられたものに過ぎない。「新城義人」の名はこの世界で俺を特定する為の記号に過ぎなかった。

記憶を失くした俺の年齢は判らなかったが、口腔内に生えかけの第一小臼歯があったこと、幾分からだが大きかった事から7歳と言う事になった。

島の小学校に編入された俺は、口がきけないことから他のガキの「いじめ」のターゲットにされた。

余所者に冷たい島の大人も、学校の教師たちも、それを見て見ぬふりをした。

俺を引き取ってくれた新城老人は変わり者として島の者達から避けられる存在だった。

寡黙で、何を考えているのか窺い知れない男だった。

寝る所や着る物、食い物には不自由しなかったが、温かい家庭とはお世辞にも言えなかった。

学校にも家にも俺の居場所はないように思えた。

しかし、ある日、いつものように傷や痣を作って泣いて帰った俺に爺さんは「悔しいか？」と声をかけてきた。

引き取られて1年近く。

初めてジイさんに声を掛けられた瞬間だった。

驚きと共に首を縦に振って肯んじた俺にジイさんは空手を仕込んだ。俺はジイさんが死ぬまで共に暮らしたが、結局ジイさんが死ぬまでに教えてくれたことは空手だけだった。

ジイさんと二人きりの稽古は辛く厳しかった。

朝晩「サンチン」で容赦なく拳や蹴りを打ち込まれ、「ガミ」をやらされた。

ガミとは、両手に陶製の甕の口を鷲掴みして持ち、摺り足で四方八方に歩き回る、握力・腕力と共に足腰を鍛える鍛錬法である。

一つ10kgの甕には徐々に水が注がれていた。

一年もすると、いじめは続いていたけれども、傷や痣を作って泣きながら帰る事はなくなった。

俺は空手に熱中した。

一つの技を全力で2万本行う度に新しい技を教えてもらった。

だが、気を抜いているのを見咎められたり、決められた数を期限内に終わられなかった時には、その数は何度でもリセットされた。

2万本をクリアして覚えた技は10万本を数えるまで、新しい技と並行して毎日稽古した。

日々の稽古の積み重ねは部屋の白い漆喰の壁に「正」の字として記されて行った。

稽古は辛かったが苦ではなかった。

厳しい稽古に耐えたとき、技を一つモノにしたとき、ジイさんのゴツイ手に頭を撫でられながら「よくやった」と褒められる瞬間だけが、俺に自分自身の価値を認めさせてくれたからだ。

中学を上がり、高校に入学したばかりの頃だったか。

初めの頃は空でも持ち上げられなかったガミの半ば程まで水が注がれた頃に事件は起こった。

俺にちよっかいを出し続けてきた10人ほどの悪童に初めて反撃を加えたのだ。

勝負は呆気なくついた。

10人の悪童は叩きのめされ、俺はリーダー格の男を叫び声を上げながら馬乗りになって殴り続けた。

駆けつけた大人に引き剥がされた時、相手の男の顔面は滅茶苦茶に叩き潰されていた。

その時、俺は言葉を取り戻したが、それを境にジイさんを除いて俺に言葉を掛ける者はいなくなった。

ガミの中身が水から砂に変わり、砂に水が注がれてから10年。

俺の部屋の壁は四方が小さな「正」の字で埋め尽くされていた。

ジイさんの死を見届けた俺は島を出た。

碌な学歴も資格も持たない俺は各地を飯場の作業員や工場の期間工として回った。

一人ぼっちの淋しさに比べれば、ジイさんに鍛えられた体に肉体労働は全く辛くはなかった。

そんな時、どこで俺の居場所を知ったのか、数年ぶりに義兄から東京に出てこないかと連絡を受けた。

俺が引き取られる前にジイさんの養子だった男だ。

ジイさんの葬式を含めて2・3度しか会ったことは無かったが、東京で小規模ながらも土建屋を営んでいると言う。

義兄夫婦は俺を温かく迎えてくれた。

島の出身者も多い職場は居心地が良かった。

やっと、安住できる居場所を見付けた、そう思った頃にあの日が訪れた。

よく晴れた日だった。俺は近所の建築現場で、トラックで搬入された内装用のボードを相方の男と下ろす作業をしていた。

全てのボードを下ろし終え、運転手に受け取り伝票を渡して休憩のために詰所に戻ろうとした瞬間、真っ白な激しい光に包まれて俺は

意識を失った。

俺が目覚めたのは病院のベッドの上だった。

3・15核テロ事件。

俺が見たのは核の閃光だった。

突如都内に生まれた直径6kmの地獄から俺が救出されたのは、事件発生から32時間後の事だったらしい。

救出後3ヶ月間、俺の意識は戻らなかった。

そして、目覚めた時、俺は住む場所も仲間も家族も、全てを失っていた。

その時から、俺は生ける屍となった。

救出された俺は奇跡的に肉体的にはほぼ無傷だった。

心配された放射線障害も現れなかった。

俺は「テロ被災者支援特別措置法」によるカウンセリング等の社会復帰プログラムおよび職業訓練を受け、政府による就職斡旋によりW社に職を得た。

W社には俺以外にも3・15事件の被害者が数多く雇用されていた。そんな中、職場に中々馴染めない俺に何かと声をかけ、世話を焼いてくれる女がいた。それが響子だった。

追放の章 3 「追放者の肖像 - 2」

新人研修を終えて配属された部署で、俺は慣れないデスクワークに難儀していた。

10年以上肉体労働しかしてこなかった俺に、細かい数字を取り扱い、大量の書類を作成する事は困難を極めた。

上司からの度重なる叱責。自分の無能さ故の連日の残業。

自分が周りの足を引っ張っていること、存在が浮き始めている事を自覚していた。

閉塞感や屈辱感に俺は早くも腐り始めていた。

ある週末の夜だった。

残業を終え、一人寮への帰り道を歩いていた俺は女の悲鳴を聞いた。声のする方へ走って行くと、3人組の男が一人の女を廃屋に引き擦り込もうとしていた。

長く続く不況やテロといった社会不安、中台・中朝紛争などの戦乱による不法入国者の大量流入により日本の治安は極度に悪化していた。

この手の事件は日常茶飯事といえた。

俺は男達に「離してやれ」と言ったが、どうやら言葉が通じないようだ。

男の一人が転がっていた角材で殴りかかってきた。

俺は前に踏み込んで左前腕で角材を受けた。

20年に渡って打ち鍛えられた手足や体躯に並みの打撃が通じるはずもない。

角材はヘシ折れた。

俺はそのまま左手で男の肩を掴み、右の掌底で顎を力チ上げながら

男の両足を鋭く刈った。

男は後頭部から地面に落ち「こん」と言う音と共に動かなくなった。

もう一人の男が右手でナイフを突き出してきた。

俺はスナップを効かせて爪先で男の手首を蹴った。

ナイフは吹っ飛び、靴の固い爪先で蹴られた手首の骨には輝くくらいは入ったのであろうか？

男は手首を掴んでうずくまった。俺は男の喉に爪先で蹴りを入れた。

3人目の男が女の持ち物であろう、金属製の杖を上段から振りかぶってきた。

杖は俺の左肩を打ったが、俺が前に出た為に手元近くが当たっただけでダメージは全くなかった。

俺は男の後頭部に両手を組んで掛け、引き付けると同時に顔面に3発、4発と頭突きを入れた。そして、男の喉仏を掴むと力一杯に握った。

酷く無慈悲な攻撃だったが、「攻める時は息の根を止めるまで徹底的にやれ」というのがジイさんの教えだったし、武器を持った相手に加減の必要はない。

中途半端にやれば、後日隙を狙われる可能性がある。

男達はピクリとも動かなくなっていた。

俺は女に「大丈夫ですか？」と声を掛けた。

女は酷く怯えた様子だったが、街灯の光で俺の顔を見ると「あつ」と声を上げた。

俺にも見覚えのある顔だった。

同じ部署で働く同僚の女だった。

「新城さん・・・ありがとう」

「いや、大丈夫ですか？ええーっと」

「・・・配属されて何週間になるの？同僚の名前くらいちゃんと覚えなさい。響子。高野響子よ」

「すみません」

「ううん。・・・助けてくれてありがとう。新城君が来てくれなかったら私・・・」

「こんな時間に一人でどうしたんですか？この辺も深夜に女性が一人で歩くには物騒だ」

「・・・職場のみんなとね。・・・ごめんなさい」

「いや、俺、回りから浮いてるの判っているし、誘ってもらっても付き合わないと思うから・・・気にしないで下さい」

「わたしもこんな体だし、女の子達の中では浮いちゃってるから新城君と同類ね」

「そんなこと無いですよ」

そう言つて視線を移すと、響子の右足は妙な角度で折れ曲がついてた。

「高野さん、本当に怪我とか大丈夫ですか？」

「ええ、でも、杖は折れちゃったし、義足も壊れちゃったみたい・・・それより、新城君こそ怪我はないの？大丈夫？」

「俺の方は大丈夫。それより、こいつらが目を覚ますよ厄介だし、人に見られても面倒だ。家は近いんですか？送りますよ」

「そうね。肩を貸していただけるかしら？」

「いいですよ。でも、こつちの方が早いですよ。少し我慢して下さいね」

そう言つと俺は響子を抱え上げた。

5分ほど歩くと響子のアパートに着いた。

1階の一番奥のドアの前で響子を下ろし「それじゃあ、おやすみなさい」と言つと、

響子は「待ちなさいよ。お茶くらい飲んでいてよ。それに、上着のボタンが取れそう。付けてあげるから中に入りなさい」と言つた。

正直、俺の心臓は3人の暴漢と戦っている時よりも激しく鼓動していた。

形は何であれ、これほど長い時間、女の体に触れていたことはなかったからだ。

多分、俺の顔はかなり赤くなっていたと思う。

この場から逃げ去りたい気分だったが、俺は響子の言葉に従った。

食卓の椅子に腰掛け、響子の淹れてくれたお茶を啜りながら俺は落ち着きなく部屋の中を見回していた。

車椅子に腰掛けた響子が俺の正面に着いた。

職場での響子は、仕事は出来るけれどもどこか取っ付き難い印象の女だった。

それが、髪を下ろし眼鏡を外しただけで柔らかい印象にガラリと変っていた。

「新城君って、強いよね。ふだん課長に叱られてる姿からは想像もつかなかったわ」

「・・・」

「新城君も『特例組』だったわね？」

特例組・・・テロ被災者支援特別措置法により優先雇用された社員をそれ以外の通常枠で雇用された一般社員や古参の社員はそう呼んだ。言外に「役立たず」とか「お荷物」という意味を込めて。

事実、テロ被災者支援特別措置法による認定被災者を雇用する事によって得られる税法上の優遇措置、様々な名目による補助金目当てに雇用する企業も少なくなかった。

特例組と面と向かって言われる事には正直、反感を覚えずには居られなかった。

しかし、そう言う響子も『特例組』であった。ただし、響子に向けられるこの言葉は嫉妬や羨望の裏返しであったが・・・響子がその晩、同僚との飲み会を中座して一人で帰ってきたのは酒に酔った同

僚の心無い言葉に居たたまれなくなつてのことだった。

「新城君も色々和不慣れで大変だと思うし、辛い事や悔しい事もたくさんあると思うけど、職場での新城君の態度、良くないと思う・
」

響子の話はかなり長くなった。耳の痛い話にうんざりもしたが、彼女の熱意が伝わってきて俺の胸は熱くなった。俺のために親身になつてくれる者が現れたのは全てを失つたあの日以来はじめてだったからだ。

「・・・という訳だから、困つた事や判らないことがあつたら私に言いなさい。わかつたわね？」

「はい・・・」

この日を境に響子は何かと俺に声を掛け、世話を焼いてくれるようになった。

響子のお陰で、俺は人並みに仕事をこなせるようになり、徐々に職場に溶け込んで行く事が出来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7457c/>

The EARTH n

2011年2月2日03時37分発行